「山のスピリチュアリティ」試論
――山の非宗教化と再聖化の観点から――

古澤　有峰

第１章 序論

１－１　背景

登山ブームと言われて久しい。近年は老若男女を問わず，様々な山で軽度の登山装備をした旅行者の姿を多く見かけるようになった。その中でも特に，中高年層を中心とした登山ブームには目を見張るものがある。本稿では，山に魅せられた人達の心情を，山岳信仰と近代登山の歴史から比較文化的に検討すると共に,そこに見られるスピリチュアリティの興隆について検証したい。その際に，現代人が寄せる山岳への思いがよく描かれている資料として，登山を題材とした山岳文学などを取り上げ，そこに描かれる人間と山との交流を通じて，現代人の文化的アイデンティティや宗教観，死生観のゆくえについても示唆を得たい。

１－２　関連研究

まず本研究に取り組むにあたり，参考となる関連・先行研究について検証したい。

１－２－１　修験道についての先行研究

日本における山岳信仰の歴史は古いが，中でも修験道（しゅげんどう）においては，平野部に住む人々が霊地として畏れ敬った山岳地帯を修行の地とし，ある種の特殊で超自然的な能力を習得した「修験者（山伏)」が，その中心に存在していたとされている。修験道についての先行研究には様々なものがあるが，ここではまず民俗学者の五来重（２００８年 a，b）による調査研究を参照したい。従来の日本仏教研究は思想史や教学史的研究に偏りがちであったが，山岳信仰や民俗信仰研究の中に民俗学的調査手法や視点を取り入れたところに五来の功績があり，それは彼の修験道研究にも強く反映されている。五来の調査手法は，修行の中に見られる修験道の体験的な側面を捉える為に必要であったと考えられる。

また宗教学者の宮家準も，修験道についての歴史的な検証を行うとともに，自ら修行の現場に参加して調査研究を行っている。宮家は修験道について「山岳を神霊・祖霊などのすまう霊地として崇めた我が国古来の山岳信仰が，シャーマニズム，道教，密教などの影響のもとに平安時代末頃に一つの宗教形態を形成したもの」であると定義している（宮家，２００１年，p.3)。こうした神社祭祀を中心とした宗教が神道の起源にあり，シャーマニズムに見られる憑依現象は，日本の神祭りの本質をなしている事から，より効果的に託宣を得る技術として，東北アジアからシャーマニズムが導入されたのではないかという宮家の指摘は，修験道における日本の独自性とア

ジアとのつながりを両方指摘している点で興味深いものである。

このような山岳信仰や修験道の研究にみられる傾向を，文献研究とフィールドワークの成果を踏まえた上で，日本の基層文化やその形成過程の解明へとつなげていこうとする研究は，柳田國男以来の流れであるといえよう。近年も例えば環境考古学者の安田喜憲，比較宗教・文化思想の研究家である久保田展弘は，修験道を宗教やいのち・こころの源流，環日本海文化やアジア文化とのつながりという観点から捉えており，民族学者の佐々木高明は，山の神信仰から日本の基層文化を探る研究をおこなっている。また仏教思想史の末木文美士は，近代と仏教のあり方からあらたな仏教的倫理を模索しているが，日本の古層・基層文化を意識した記述の中で山岳信仰や修験道に言及している。

一方でこうした流れからは，当初は個別の事例が対象であっても，最終的にそれを取捨する事で日本全体に普遍化したり，その独自性を強調したりする傾向が出てくる。その場合，近年用いられるようになったスピリチュアリティという言葉（１ － ２ － ２にて後述）や，ナショナリズムへの潜在的な指向性が見られたりするのも注視すべき点であろう。例えば梅原猛や山折哲雄，町田宗鳳や鎌田東二などは，山を聖なるものとみなす日本人の心の源流は遠く縄文の昔にまで遡る事が出来，またもう一つのルーツは中国大陸やアジアに見て取る事が出来る事，しかしこうしたルーツを踏まえた上でも，他にも仏教や民俗宗教の影響を受けた日本の山岳信仰は日本独自のものであり，日本人の身体の古層にある聖地感覚やスピリチュアリティに由来するものである事を強調しているのが特徴である。

１－２－２　ナショナリズムとスピリチュアリティの先行研究

こうしたナショナリズムとスピリチュアリティの関係性に関する先行研究としては，宗教学者の島薗進による研究が挙げられる。前述のように山岳信仰や山の神の宗教性・スピリチュアリティを語る事により，ナショナリズム的指向を示す言説が増えているが，島薗はこうした近年の傾向について，以下のように述べている。「日本の場合，新霊性運動とナショナリズムとの親和性が気になるところである。１９８０年代以降，日本社会のなかでじわじわと文化的なナショナリズムが強まっているが，新霊性運動はこの動向におおいに貢献していると思われる。（中略）梅原猛は，新霊性運動的な考え方にもとづき，日本文化の優位を説いてきた代表的な知識人である」（島薗，２００７年，p.353）。

本稿においてスピリチィアリティという言葉を用いる際には，上述の島薗による「個々人が聖なるものを経験したり，聖なるものとの関わりを生きたりすること，また人間のそのような働きを指す」という定義を中心に考える事とする。島薗は基本的にスピリチュアリティという言葉を「新霊性運動＝文化」として捉えており，欧米におけるスピリチュアリティ研究において示されるスピリチュアリティ概念で示されるような，ホリスティックな世界観や自己への内省的態度，制度に拘束されない個人の自由な探求といった要素（Roof 1999, Wuthnow 1998, Beckford 1992, Heelas 1996, Storm 2002 等）を，より広い観点から包括していると言う事が出来よう。

これは別の見方から考えれば，日本のスピリチュアリティ研究が，欧米のそれよりも幅広い文脈で行われているという事を示している。従って，研究者がスピリチュアリティの言葉を用いる際にも良く言えば柔軟性が高いが，別の見方をすればそれぞれに都合の良い用い方を戦略的に行

う可能性も高いという事になる。日本の山岳信仰や修験道は，歴史的・考古学的に見ても明らかに大陸の神仙思想の影響を受けている。しかし新霊性運動的な考え方にもとづき，日本文化の優位を説いてきた代表的な知識人達の間では，近代化や世俗化に抗しようとするあまり，それを過小評価しすぎる傾向がある。

こうして日本文化の優位を説く場合，日本の基層文化に宿る宗教性を示すものとしてスピリチュアリティという言葉が使われるのであるが，こうした用語の使用そのものが近代との関わりの中で創成されたものであり，いずれにしても本研究の関心とする問題においては，そうした前提そのものが検討の対象となる。なぜならその通奏低音を乱すような，日本の中にある多様な背景を持つ「わたし」達の声は，こうした前提をもとに往々にして無視される事が多いからである。ここには個人の自由と国家・宗教観との相克と共に，マイノリティに位置づけられる人達の立場をも包括した，社会に集う全ての人々を対象とした公共性を問う研究の必要性が見られるといえよう。

１－２－３　山岳信仰と女人禁制に関する先行研究

このような公共性とマイノリティにかかわる研究のうち，山岳信仰や修験道研究に関連してよく指摘されるのは，女人禁制に関する問題である。２００４年７月の「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産指定にともない，大峰山の山上ヶ岳の女人禁制問題が，改めて議論されるようになったが，その際，解放派は女性差別というジェンダー的な視点から，男女平等に基づいた世界遺産への女性入山を主張，一方で護持派は役行者以来の１３００年の伝統を主張しており，それはさながら人権と伝統文化の対立の様相を呈している（岩鼻，２００６年）。

民俗学者である宮本常一は，その著書『女の民俗誌』の中で，女性差別の原因の一つは儒仏思想にあるとし，また庶民の歴史の中でほとんど明らかにされていないのは女性の歴史であるとしている。それにも関わらず，従来の女人禁制についての議論は肯定的であれ否定的であれ，歴史学的立場からの起源論に限定されてきた傾向があった。例えば鈴木正崇はその著書『女人禁制』において，何故古来より山岳寺院や修験の山々において，女性による入山・参拝や修行が拒まれてきたのかについて検証している。現代では女性差別として批判されるこうした慣行としての女人禁制を支えていた，当時の思想背景や仏教的な教義について検討する事により，日本人の穢れの観念について再考している。

一方で岩鼻通明の論文のように，従来の二項対立的な議論の中に地理学的な論点を投じている研究もある。岩鼻は，前近代の日本各地の霊山は一律で女人禁制であった訳ではなく，また近世の山岳信仰においては，女人禁制に限らない複合的な規制（登拝の季節や案内人を付ける義務など）が存在していたとして，規制の根拠を性別ではなく山の大きさや傾斜に求めている。つまり標高差が大きくなく，景観の垂直遷移が顕著でない場合は，山中他界を設定するのが難しくなり，女人結界を設定する必要がなかった。また険しすぎる奥山は信仰登山には不向きで，この場合は安全な登拝の為に規制を設けたという。しかし真の保護を目的とするのであれば，熟達した案内人の随行を義務付けるだけで十分なはずであり，いずれにしても属性による規制は不必要であろう。このように考えれば，これは排除する側からの排除される側への，性別による規制と見なされても仕方がない点である。

日本の宗教思想史や仏教文化論の研究者である阿満利麿は，その著書『宗教は国家を超えられるか―近代日本の検証』の中で，近代天皇制国家において作られた文化の在り様を，宗教の観点から多面的に検証している。その中で「女人禁制」は，近代天皇制国家において構築された数々の「疑似伝説」の一つとして捉えられている。阿満は「死の排除と神秘の抑圧」をキーワードに，何が近代天皇制国家を支えてきたのかを検証し，近代日本の国家中心主義を超える道を模索している。こうした先行研究が指摘するのは，問われるべきは国家を相対化し，その影響がどのように及んで来たかを適切に読み解こうとする態度の必要性であり，女人禁制を始めとした「疑似伝説」が生じた背景を，アイデンティティや排除という観点から再構築していく事の必要性であるといえよう。

１－３　本研究のねらい

以上，先行研究をそれぞれ検証してみると，共通のテーマとしてアイデンティティをめぐる問題や，弱い立場のもの（マイノリティ）の排除の問題が内包されている事がわかる。例えば，上述のような多様性を受け入れる形で盛んになったものに熊野信仰があるが，こちらの方は江戸時代後期に，紀州藩などによる山伏や熊野比丘尼の活動規制，また続けておこった明治時代の神仏分離令により衰退していった（小山，２０００年）。ここにみられるのは中央集権化に伴って行われた，異質なものを排除する動きである。これは権力を有する側や多数派，また健常で一定の立場の日本人成年男性をプロトタイプとした考え方であり，保護という名目で行われた，それ以外の属性の人々に際する差別・排除と言えよう。

このように見ていくと，山岳信仰自体が「排除する／排除される」歴史の両方を経てきたものである事がわかる。阿満も指摘しているように，現代日本人の７ー８割は自らを無宗教と見なしており，葬式仏教は社会に広がっているものの，それを自らの信仰として意識的に捉えている人は少ないという事になる。こうした社会の中では，修験道的信仰は主流の仏教に比べても，むしろマイノリティに属しているというのが現状である。一方で神道との関わりを，国家神道や天皇制と近づけて見る考え方もあり，こうした中心性と周縁性を併せ持つ文化・信仰としての修験道が，ナショナリズム的指向を持つ人達に支持される理由は，それが失われた日本の伝統や古層と言われるものへの回帰を目指すような方向性を持つからである。

こうした研究の限界という視点から考えれば，まさにこの前提こそが，さらなる多様な背景を持つ人達を意識的・無意識的に排除する機能を果たしているという点を強調したい。前述の宮本が別著『山の道』で記したように，本来少数派についての歴史的記述には権力作用が働き，記述の信憑性についての問題を伴うのは宿命であるが，上述のような日本の古層を前提とした議論には，誰がどのような立場・権威によって，どのように措定する事になるのかという視点が全く抜け落ちてしまっているのである。公共性やジェンダー，マイノリティについての議論を踏まえずに，修験道の復興が日本の基層文化を解明する事につながり，それがまさに「日本の宗教」だと言われてしまう事に，違和感を感じる人達は多い。むしろ多様な立場の人達の視点から見た，特定の宗教やナショナリズムによらない「山のスピリチュアリティ」とも呼べるような心性を明らかにする研究が，今後一層必要になると考えられよう。

例えば近年，専門の山岳誌のみならず登山の特集を組む雑誌も増えているが，そういった中に

従来の日本の山岳信仰や修験道にみられるスピリチュアルな部分に関心を持ちながらも，接点を見いだせないという記述も散見される。こうした従来の山岳信仰や修験道における「日本の宗教」的言説のあり方に違和感を感じる人達は，自分は当事者としてその中には所属していないと考えている。また日本の山岳信仰の中に見られるナショナリズムと，戦前戦中の国家神道的イメージを重ねる人達は，そんな伝統からも離れてもっと自由に山との付き合いを楽しみたいと感じるのではないだろうか。

このように現代日本における「山のスピリチュアリティ」をめぐる言説について考えていく事は，日本において前提とされてきた「想像の政治的共同体」（アンダーソン，１９９７年）としての国民のイメージを揺り動かし，そうした虚像を否定・崩壊させる可能性につながっていく。従来の秩序や類型化の上に成り立つ日本・日本人論が根拠を失い，その自明性が解体されていくことによって，はじめて排除する側とされる側の歴史的な相互形成プロセスを検討する事が可能になる。国民国家としての日本の抑圧的な側面を超克していく為のヒントが，そこには確かに含まれているのである。

以上のような問題意識を踏まえ，本研究においては伝統的な日本の山岳信仰とはまた別の文脈から，宗教・信仰登山とは異なる近代登山を指向した人達について考察をおこないたい。かれらは何故，伝統的な山岳信仰からは離れた形での登山に魅入られたのか，またそこでかれらが求めた，ある種の伝統指向を持ったナショナリズムからは離れた「山のスピリチィアリティ」とは一体何なのかを明らかにしたい。その際，近代登山に関わる人達の心情を描くものとして，近代登山史とともに近代山岳文学を取り上げ，かれらが求めた山のスピリチィアリティとその興隆が，現代において何を意味するのかについて分析を試みたい。

第２章　近代登山にみる山のスピリチュアリティ

２－１　分析（１）

２－１－１　西洋における近代登山と山岳文学

フランス文学研究者の桑原武夫は，登山とは文化的行為であるという。自らも日本山岳会会員であった桑原はその著書『登山の文化史』の中で，文献に残る最古の登山は紀元前１８１年，マケドニアの王フィリップが軍事上の目的も兼ねて，標高２８００メートルのハエムス山に登ったのが第一であるとしている。また他にもシチリアのエトナ山などを哲学者や王族らが登ったとされるが，古代の人々は概して山には無関心であり，山の神秘化・迷信化が始まるのは中世以降の事であった。つまり古代においては無関心であったが故に登山を積極的に妨げる理由もなかったが，中世になって山は恐るべきものになり，登山が盛んになりようのない土壌が生まれた。それを打破するものとして影響を与えたのがルネッサンスであり，近代登山はルネッサンス以後に勃興を見たのである。

桑原によれば，ルネッサンスから始まったヨーロッパ近世において，ルネッサンス初期のイタ

リア三大詩人の一人ペトラルカが，１３３６年に南フランスにある標高１９１２メートルのヴァントウ山を登ったとされるのが，ルネッサンス期における登山の最初である。しかし同時に桑原は，近代アルピニズムの特徴を近代科学精神との結びつきと非宗教性にあるとした上で，ペトラルカが山頂で人間の生死や聖アウグスチヌスに思いを馳せている事を指摘，その意味でこうしたペトラルカの登山はむしろ中世的登山であるとしているのは興味深い。またペトラルカからおよそ２００年後には，レオナルド・ダヴィンチがアルプス登山を行っている。その登山記には宗教的記述よりも自然科学的観察が多く書かれる等，近代的登山の萌芽がみられるものの，ヨーロッパの近代登山が全体の流れとなるまではなお時間が必要であった。

荒れたアルプスの山肌が旧約聖書の大洪水の後と解釈されたり，ヨーロッパ最高峰のモンブランが「呪われの山」と呼ばれたりしていた事，長い間アルプスが悪魔や竜の住む魔の山として考えられてきた事等を指摘した上で，こうした迷信を取り払って山を単に岩や土，氷などの物質で出来たものだと考えられるようになったのは，ルター以降の宗教改革の影響が大きいと桑原は指摘している。つまり，キリスト教全体の権威の失墜やプロテスタンティズムの合理主義，また山の物質化が進む事によって宗教的登山が解消され，近代的登山の基盤が作られたのである。桑原が以上を踏まえて，イギリスやドイツ等の新教国の方が，フランスやイタリア，スペイン等の旧教国よりも近代登山が盛んな理由をここに求めているのは興味深い点である。

また桑原は，近年のローマ法王や僧侶の中にも優れた登山家がいた事を指して「宗教家自身も近代化している」と指摘，そこに近現代以降の時代の精神を読み取り，近代登山の精神が山の神秘性を剥ぎ取るような科学精神にある事と矛盾はしないとしている。また一般の人々に山に関心を持たせ，山に駆り立てるようにした最大の貢献者はジャン・ジャック・ルソーであり，ルソーの「自然に還れ」という言葉が１８世紀以降のヨーロッパの登山ブームに与えた影響は大きく，ヨーロッパ・アルプスの初登頂が１８世紀初頭である事は決して偶然ではないと言う。

こうした近代登山の中心となったアルプス登山が登場する文学を一つ例にとると，日本でもよく知られる，スイス人女性作家ヨハンナ・シュピーリ(Johanna Spyri)による作品『ハイジ』（１８８０－１８８１年）が挙げられよう。本来，教養小説とされるハイジの原作（原題『ハイジの修業時代と遍歴時代』『ハイジは習った事を使う事が出来る』）はゲーテの作品（『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』）からの影響を受けており，全体にキリスト教的な描写が多く見られる事は，日本ではあまり知られていない。

また作中にはアルプスをめぐるイメージの変遷も見て取れる。舞台となる１９世紀のスイスアルプスはイギリス人登山家達のメッカとなっていたが，前述の通り近代以前のヨーロッパでは，アルプスはもともと悪魔的エネルギーが渦巻く異境・魔の山として捉えられていた。辺境・異境としてのアルプスからきたハイジは，ドイツの近代都市フランクフルトの生活の中で心を病んでしまうが，アルプスに戻る事で心身の健康を回復する。また足の不自由なクララはアルプスにハイジを訪れ，アルプスの自然に触れることで再び自らの足で立ち上がる事が出来るようになる。このように「つくられた異境」（河西，２００１年）としてのアルプスは，近代化に疲れた人々の心身を浄化する存在として描かれているのである。

一方でロイス・キース(Lois Keith)は，同じ作品に異なる視点を投げかけている。キースは，こうした『ハイジ』をはじめとした少女小説で繰り返される障害の奇跡的治癒というモチーフが，

読む人の障害観をゆがめてしまっていると指摘している（ロイス，２００３年）。つまり障害は克服すべき悪であり，女性に対する伝統的な価値観の範囲での成長だけがそこでは求められ，それによって障害は奇跡的に治癒するというのが物語の前提になっているとし，神を信じれば障害は治癒可能というキリスト教的救済の観念と，女性としての従順な行動を求めるジェンダー規範の問題がそこには存在していると批判している。『ハイジ』の場合，こうしたキリスト教をめぐる伝統と近代化の衝突が展開される場所として，異境・辺境としてのアルプスとその自然が選ばれているというのは興味深い点である。

またトーマス・マンの小説『魔の山』では，第一次世界大戦以前のスイスアルプス山麓，ダボスにあるサナトリウムが舞台となっている。結核と診断され入院している主人公のハンスは，バルコニーから雄大な雪のアルプスを眺めるうちに，その厳冬の自然の中に自らを置きたいという欲求にかられるようになる。そして遂に病院の忠告を無視して白銀の雪山に分け入ってしまうのであるが，絶対的な美と荘厳な佇まいを持つその自然の中で，ハンスは感動と共に「山のスピリチュアリティ」とも呼べるようなものに包まれる体験をする。壮大な人間論の大作であると共に，病と死のイメージに満ちたこの作品の中には，近代以前の魔の山としてのアルプスのイメージも，近代以降の自然観の変遷と共に付帯された清廉・浄化・健康のイメージも，それぞれ印象的に盛り込まれている。そして忍び寄る戦争の足音とともに，来るべきヨーロッパ・キリスト教的価値の大転換期の訪れを感じさせるものとして，主人公と山のスピリチュアリティとの遭遇が描かれているのである。

２－１－２　西洋における山の非宗教化とスピリチュアリティの興隆

次に登山家・冒険家であるとともに作家である，現代の二人のアルピニストによる「山のスピリチュアリティ」についての記述を検証したい。

マリア・コフィー（Maria Coffey）はカナダ在住の作家であり，彼女自身が冒険家・登山家でもある。限界に挑む登山家達の心理を分析した著作を幾つも執筆しているが，その中でもパートナーであった著名なイギリス人登山家，ジョー・タスカー（Joe Tasker）　のエベレスト遭難とその死について執筆した著書，*Fragiled Edge*（1989，儚き山稜―筆者訳）により良く知られている。標高の高い山々を冒険・登山する人達の内面について記述するコフィーは，犠牲やリスク，喪失についての物語を描く事により，遭難した登山家達だけではなく，残された遺族の側の悲しみや混乱，怒りや癒しの過程についても言及していく。

本書でのコフィーは登山家としてだけではなく，何よりこの残された遺族の側の視点からも様々な考察を試みていることが印象深い。１９８２年，タスカーとその登山パートナーであるピーター・ボードマン（Peter Boardman）は，共に冬のエベレスト北壁登頂を試み，登攀中に志半ばで行方不明となった。コフィーはタスカーとの愛情，登山の過酷さなどを記述するとともに，ボードマンの未亡人と共に二人の足跡を辿り，最期の地となったベースキャンプを訪れる事で，長い時間をかけて愛する人の死という悲劇を理解し受け入れる術を学んでいく。

コフィーは別の著作（Coffey, 2003）でも，想像を絶する極限状態に立ち向かっていく冒険家・登山家達とその家族達，それぞれの心理・感情面についての分析と考察を，自らの経験も踏まえながら行っている。コフィーによれば，登攀中に重傷を負おうが命の危険にさらされようが，次

々に続く危険な山への挑戦は非常に魅力的であるという。これは脳内に生じるエンドルフィンの影響もあると言われているが，実際の臨死体験等も含めた文字通りの命がけの体験が，究極のアスリートである冒険家や登山家達を，スピリチュアルな世界や全てを越えた霊的な交流へと誘う効果があるという（Coffey, 2008）。

いずれにしてもそうした危機的状況下で，意識が透明になるようなある種の瞬間を経験した冒険家や登山家達は，山々のスピリチュアリティとその魅力に取り憑かれるあまり，実生活での家族を置き去りにしがちになる。しかしそうした身体・精神的苦痛が続いても，奇妙なまでに強い家族の絆がそこには存在し，登山家がなぜ繰り返し危険な山への登攀を続けるのか，その理由については，登山家やその家族同士の間では説明の必要がないほど自明の事であるという。登山家にとって，他の登山家との競争や自然との対峙は，自らの人生やアイデンティティの基本的な部分を占めている。それは自らの生を認識し，自己を定義する事と同義である。従ってそこにどのようなリスクが待ち受けていようとも，また重傷を負い身体の一部を切断したような場合でさえも，登山家達は命ある限り再び山へと戻っていき，家族はそれをまた応援するのだという。

コフィーの文章の中には，かなりリアルで身震いする程の事故の詳細も含まれているが，こうした記述を読む事で，登山をする人達もそうでない人達も，登山家達とその家族の心情に思いを馳せずにはいられない気持ちになる。そこには人間の死生に関わる重厚なドラマが繰り広げられており，一般に近代山岳文学と呼ばれるものの魅力も，おそらくここにあるのではないだろうか。現代人にとってそれは伝統宗教の教義の代わりとも呼べるものであり，そこに見られるのは近代による山の非宗教化の後に新たに出現した「山のスピチリュアリティ」の飽くなき追求なのである。

次に欧米の山岳小説家の中でもユニークな存在として，作家のジョン・クラカワー（Jon Krakauer）の例を挙げてみたい。日本では２００８年に封切られた映画『イントゥ・ザ・ワイルド』の原作である『荒野へ』（１９９７年）の著者であるクラカワーは，エベレスト登攀の経験もある登山家・冒険家である。実際に遭遇したエベレストでの遭難事故についての著作（２０００年）があり，またカルト的宗教の実情と問題点についての著作（２００５年）でも良く知られている。『荒野へ』は，裕福な生活を送ってきたエリート大学生が自らの出生の秘密を知り，卒業を契機に今までの生活と前途有望な将来を捨て，自由を選択する為にアラスカへの放浪の旅に出るという実話をもとにしている。

最後に主人公クリスは，アラスカの荒野に打ち捨てられたバスの車体の中で，衰弱死を遂げているところを発見される。前述の著書の中でクラカワーは，登山家・冒険家としてクリスの心理が理解出来るとしている。モノにあふれる世界や偽善的な人間関係を捨て，大自然の中で自給自足の生活を続ける主人公は，行く先々で心暖かい人々と出会い，他人と時間を共有し合う事で人は幸せを感じられると悟る。こうして人と人とのつながりのなかに自らの存在意義を見出した一方で，それまでの一人旅で様々な困難を乗り越えてきた自信が，最終的に彼自身の判断を誤らせ，結果的には命を落とすという結末へとつながってしまう。しかしクラカワーは，クリスの挑戦を悲惨なものとしてではなく，本質的には人生の意味を模索した前向きな行動であったと捉えている。自らのアイデンティティと究極の自由を求めた主人公の魂を救ったのは，こうした人と人とのつながりの中にある何かであったのではないだろうか。

自由を求める近代人の心は，このように危ういバランスの上になり立っている。信仰の為の登山とは違い，近代登山では究極の危機的状況を敢えて求めていく人々の姿が見られる。安全の為の技術や装備の向上はあっても，そこには伝統的な文化装置としてのタブーやセーフティーネットは存在せず，それをむしろ壊していく事こそが究極の自由であると捉えられている。聖なる山と向き合う事は，山のスピリチュアリティに触れるとともに，限界への挑戦や克服を通じて自らを問う事でもある。伝統的な宗教やナショナルなアイデンティティへの回帰，あるいは性別や身分による差別・区別はそこには存在せず，しかしそこで生じる決断の結果は，最終的には自己責任として問われる事になる。前提とされているのは，究極の個人の自由を本質とする世界であり，それは時に行き過ぎたリベラリズムにもつながる可能性を含んでいる。そこに存在するのは「自由のパラドックス」（佐伯啓思，２００４年）であり，過去からも現在からも，また周囲とのつながりからも切断された，孤独な現代人の肖像であるといえよう。

２－２　分析（２）

２－２－１　日本における近代登山の歴史と大衆化

次に，日本の近代登山の歴史について概観・検証したい。前述の桑原武夫は同書の中で，登山の流行の基盤には市民社会の存在があるとしている。古代や中世の登山は王侯貴族に限られていたが，市民社会の形成とともに登山が激増する事になったのであり，ヨーロッパでまず近代登山が盛んになった理由を，後の植民地主義の影響とともにこの点に見ている。その上でこうした考えに基づけば，既に独自の市民生活が形成されていた江戸時代の日本に登山が相当流行した事の説明となるという。

桑原は，日本の登山は徳川期の登山が地盤をなすにしても西洋から伝わったものであり，しかしそれを受け入れる基盤が既にそこにはあったからこそ隆盛を見たのであるとして，わずかながらそれ以前の人々による山との関わりを問うとともに，それとの区別を行っている。自然との融和といった宗教・趣味的な気持ちの為に，山との敢闘の精神の元となる自然科学が起こらず，その為に近代登山の発生を見なかったのだとする桑原の視点は西洋寄りであると言わざるを得ないが，近代登山が何たるかという桑原の考えを良く示している部分でもある。桑原がフランス文学・文化研究者であると共に，日本近代登山の象徴でもある日本山岳会会員でもある事を考えれば，修験道を始めとした日本の近代登山前史にあまり多くの注意を払っていない事は致し方ないと言えるかもしれない。

日本における近代登山の始まりをどこと考えるかについては諸説ある。江戸幕末から明治にかけて様々な欧米人が，富士山や箱根，日本アルプス等を登っており，明治時代を日本アルプス登山史第一期と捉えたり，後に日本山岳会となる組織が設立された１９０５（明治３８）年を近代登山の始まりとしたりする等，様々である（はま，１９９４年）。また明治末から大正にかけて，日本アルプスに登山する人達が増え始めていたが（菊池，２００３年），いわゆる大衆登山の第一次ブームは１９５６年のマナスル登頂がきっかけに起こり（松田，２００５年），第二次ブームはその３０年程後に始まった中高年登山の大流行の事を指すという。現在は，仮説的には第三次ブームに入っているとする人達もいるようである。

菊池俊朗はその著書『山の社会学』の中で，大衆登山がなぜ現在のような隆盛を見たのか，その現状と弊害について様々な検証を行っている。菊池はコンビニエンスストアの普及や，高速道路網の発展等を例に挙げ，こうした現代の便利さの拡大が，現在の日本百名山登山などのブームを引き起こしている大きな要素の一つであると指摘している。また小泉武栄は自らの著書『登山の誕生―人はなぜ山に登るようになったのか』において，日本とヨーロッパの登山を巡る状況等を比較検討しながら，人間が山に魅了されるその理由について検討を行っている。前述のように，古来ヨーロッパにおいて山は悪魔の棲家として忌み嫌われると共に，修道院的な修行の場であった。近代的登山が発祥したのは２００年ほど前のヨーロッパで，楽しみとしての登山が日本で普及するのは，それから１００年後の明治末期になってからのことである。

この差が生まれた理由について小泉は，ヨーロッパの場合は山の征服・初登頂を目指し，そうした困難を競うところに価値が置かれ，日本の場合は測量登山など未知への踏査が主流であったからだとしている。しかし一度楽しみの為の登山の歴史がスタートした後は，日本とヨーロッパのその後の登山の歴史は同じ道を辿り，こうして近代登山は一部のエリートによるものから大衆化していった。登り方についても難しいルートをより厳しい季節に登攀するという流れから，開発された山々を近代的な装備で安全に登るという方向に変わっていった。

これは例えば富士山登山の場合，信仰的登山がより大衆化した富士講のような流れが，近代化の影響を受けてさらに大きな規模で非宗教化した登山へと変化した流れとして捉える事が出来る。日本では山岳信仰と近代登山が欧米に比べて関連し合っている部分が大きく，その背景には，前述のヨーロッパ近代登山史に見られる神や教会の権威との対決というような構図が薄い事，さらに測量登山などを始めとした踏査が国家主導のプロジェクトとして行われた事から，山との関わりの主導権が宗教的権威から離れて，そのまま国家的権威へと移譲されていった事などが挙げられる。こうした近代化の影響を大きく受けた日本の近代登山は，否応無しに大きく大衆化せざるを得なかったのである。

実は『日本百名山』（２０００年）を執筆した深田久弥は，当時既にあったそのような傾向について批判的であった。初版当時は６０年代の半ばであったが，既に開発された山々の決まりきったコースを，人々が物見遊山に大挙して歩くような，大衆化した登山のあり方を嘆いていたようである。そこに疑問を投げかける為に，深田は万葉の時代から修験道が行き交っていた時代，また芭蕉や宮沢賢治に至るまで，文学に謳われ古い歴史を持った霊山や名峰を自らの視点で選び，実際にすべての山頂に登りながら紹介した。これはもともと江戸時代より日本の山の中から名山を選ぶという伝統があり，それを受けて行われたという経緯がある。

例えば江戸時代後期の画家，谷文晁による『日本名山図会』は，こうした伝統から生まれた代表的な作品の一つであるが，谷が選んだ名山の中にはそれほど標高の高くない山々が含まれていた。谷の画集は当時，部屋に籠って描く絵画が主流だった時代に，実際に山々を旅しながら名山を選び描いていったもので，現在も谷の絵の構図を意図的に真似たオマージュ写真が撮影・出版される等，江戸時代と近現代の橋渡しをしたと言える程の意義を持つものである。しかし標高に関しては近代登山の基準から見た場合かなり低いものが含まれており，深田は自らが名山を選ぶ際にはそれを不満とし，品格や個性，歴史を兼ね備えた山という基準と共に，そこに１５００メートル以上という標高を設定した。その一方で，古くからの歴史がある筑波山等の場合はそれよ

りも低い標高でもよしとするなど，深田の名山選びには近代登山の価値観と伝統に基づく価値観の融合が見られるのである。

登山は元々脱俗的な側面があるが，深田の場合はこうしてその中に教養主義を加え，名山巡りを行う事によって教養を育む登山を目指していたと考えられる。従ってそれは大衆的登山とは自ずと区別されており，むしろ前述のような修験道や巡礼の伝統の流れを汲むものでもあった。深田は『日本百名山』の中でも，折に触れて行者による信仰登山の伝統に言及したり，山頂で目にする山岳信仰の痕跡を紹介したりするなどしている。このように日本の山岳信仰の伝統と，西洋の近代的教養主義の融合を試みたとも言える深田の姿勢は，現代日本人と近代の超克の問題を考える際に示唆に富んだものである。

一方，それが新たに近年の登山ブームを引き起こし，更なる山の大衆化や俗化を助長したのは皮肉な事だともいえよう。百名山ブームのきっかけとしては，登山好きで自身も日本山岳会会員である皇太子徳仁親王による言及や，テレビ等の紹介による影響も大きかったと言われる。一般大衆と山の距離を縮めたという意味で重要な役割を担ったとも言える深田の活動ではあったが，その一方で，そうした「百名山」巡りは山伏等の専門的立場にある人達の修行とは別物であったから，早晩大衆化していく事も避けられない運命であった。

大衆化した登山と冒険的登山のスピリチュアリティの違いを整理すれば，前者は大いなる自然に触れる事でスピリチュアリティとの関わりを楽しむが，より通常の娯楽や健康法に近くなり，後者は孤独に危険と向き合う事から生じるスピリチュアリティを見詰め直すという点にある。西洋においては神との関係性や山の非宗教化の流れから，探求的なスピリチュアリティとの関わりを先鋭化させて来た歴史があった。しかしこうした冒険的登山の流れが，後に帝国主義や植民地主義の影響を受け，未踏峰を目指してナショナルチームを編成，資金面の援助を受けると共に，国威発揚に大いに貢献したという歴史も持つのは，ナショナリズムとスピリチュアリティの関係を考える際に興味深い点である。

近代国家となった日本の場合も，国家主導または影響を受けた登山という点で類似の状況（前半は国内測量登山や軍隊訓練としての登山，それ以降は海外未踏峰登攀など）があり，戦後もその流れはしばらく続いたが，同時に国家主義とは一線を画した個人による登攀や冒険もそれぞれ盛んになり，探求的な登山を求める日本人アルピニスト達が増加した事も見逃せない。このように大衆化した近代登山は，探求的な登山の影響を受けながらもそれとは別に発展し，一方で探求的な近代登山は，個人的指向とナショナリズム的指向とが時に錯綜した様相を見せながら展開されていった。こうしたテーマが日本の山岳文学で多く取り上げられるようになったのは，山に魅せられた作家達自身が，そうした時代の変化を敏感に感じ取っていたからだといえよう。

２－２－２　現代日本における登山と山岳文学

大衆化した近代登山においては，登山用具の発達や軽量化などもあり，中高年でも気軽にレクリエーションとしての登山を楽しむ事が出来るようになった。それにより健康増進としての登山が一般化した一方で，環境汚染や遭難事故数の増加等，功罪様々な帰結をもたらした。いずれにしても，これにより従来宗教的登山とは無縁であった人達に，山の自然の中にあるスピリチュアリティともいえるものに触れる機会がより多く提供されるようになったのは事実であろう。特定

の宗教的教義には依らない聖なるものとして，こうした山のスピリチュアリティに魅入られて登山をする人達を始め，山に登らない人達さえも惹き付ける「近代山岳文学」の魅力について，以下に考察を続けたい。

近代登山を題材とした文学作品は日本でも長く人気があり，その多くが実話をもとにしているのが特徴的である。幾つか例に挙げると，例えばノンフィクション作家の佐瀬稔は，伝説のアルピニスト森田勝や長谷川恒男についての著作（１９９８年 a，b）を残している。また彼自身の闘病記を含む遺稿集（１９９９年）は，世界的冒険家植村直己を初め，志半ばで逝った８人の登山家達の軌跡を記したものであり，それはまるで佐瀬自身が自らの闘病を重ね合わせて記しているかのような鬼気迫るものである。

また陰陽師シリーズや SF 的作品で有名な夢枕獏も，実は柴田錬三郎賞を受賞した『神々の山嶺』（２０００年，後に谷口ジローによりコミック化）という山岳小説を書いており，人は何故山に登るのかという永遠のテーマを題材にした本作品でも人気を博した。また２００８年のマンガ大賞を受賞し脚光を浴びた『岳』は，近代山岳小説の伝統を受け継いだ山岳コミックであり，様々な読者層から大きな支持を得ている。こうした動きからも，現代の日本においても山岳におけるストーリーが展開される作品の人気が依然として根強い様子が伺われる。

日本での山岳小説の古典的金字塔とされる新田次郎の一連の作品の場合も，その多くはやはり登山家や山に関わる活動をした人達の実話をモデルとしている。新田のデビュー作である『強力伝』（１９６５年）は，富士山への思い入れとともに，強力（ごうりき）という存在への尊敬と複雑な心境が入り交じった内容で，山を舞台に人を描くという新田作品の真骨頂が既に十分に現れている作品である。他にも幾つか例に挙げると，『孤高の人』（１９７３年，後に新田の小説を原案とし，坂本眞一によりコミック化）は戦前の不世出の日本人登山家，加藤文太郎の生涯を描いた作品で，常に単独登攀を貫き，志半ばで逝った伝説の登山家の生涯が描かれている。これは『栄光の岸壁』（１９７６年），『銀嶺の人』（１９７９年）と並ぶ３部作と呼ばれており，人は何故山を登るのか，人間の死生とは何かという共通のテーマがそこには含まれている。

『栄光の岸壁』は戦後活躍したハンデを持つクライマー，芳野満彦がモデルといわれている作品である。高校時代の八ヶ岳登山で凍傷にかかり足の指をすべて切断するなど，クライマーとしての致命傷を負いながらも，なお止まない登山への思いからリハビリを重ねてマッターホルン北壁を制覇した，芳野の半生が描かれている。また『銀嶺の人』に登場する二人の女性登山家は，実在の女性クライマーである今井通子と若山美子がモデルとされている。二人の全く性格の違う女性が出会い，マッターホルン北壁に挑戦する中で，山と向き合い自分自身や人生を見つめていく過程を描いた作品となっている。

新田はこうした多様な属性を持つ個々の登山家達を描く作品とともに，日本人と山に関する歴史を踏まえた様々な著作も残している。例えば自ら関わった気象庁のレーダー建設プロジェクトを題材に，厳しい山の自然の中で近代国家によるプロジェクトに命を懸ける人々を描いた作品『富士頂上』（１９７４年），また日露戦争直前に行われた雪中行軍訓練中の遭難という実話を元に描かれた小説であり，リーダー論として今なお広く読まれている『八甲田山死の彷徨』（１９７７年，同年映画化）や，大正期に実際に起きた，教師と生徒が集団登山中に遭遇した事件の悲劇を描いた『聖職の碑』（１９７６年，１９７８年映画化）は映画化もされた。

日露戦争直後が舞台の『劔岳―点の記』（１９７７年，２００９年映画化）では，日本地図最後の空白地であり，宗教的理由から登ってはならないとされていた劔岳に初登頂しようとする，発足間もない山岳会と陸軍の測量隊の確執が描かれている。近代登山を中心的に描きながらも宗教的登山を重要なモチーフとしており，作中には行者が重要な役割で登場する。また山頂に古の行者登頂の痕跡が見られた事で，初登頂に威信をかけていた軍部が失望する様子は，山岳信仰と近代登山についての新田の視点が象徴的に描かれており興味深い。

新田の作品は今なお読み継がれ，新たに映画化もされるなど根強い人気がある。近代登山を題材としたもの以外にも，富士講を舞台とした宗教登山を題材にした『富士に死す』（１９７４年）や，自らの贖罪を槍ヶ岳の開山に懸ける修行僧の生涯を描いた『槍ヶ岳開山』（１９７７年）のように，正面から信仰と登山を扱った作品もあれば，スイスアルプスへの近代日本人の憧憬を反映させた紀行文（１９７９年）なども執筆している。新田は山岳信仰の伝統と近代登山の現代性の融合を目指し成功すると共に，日本人と山の関係を通じて前近代から近代，そして現代へとつらなる歴史の流れを描こうとした希有な作家であったといえよう。

２－３　まとめと考察

以上，近代登山と山岳文学との関連について考察を行った結果，近代アルピニズムの特徴が近代的な科学精神や探究性との結びつきと山の非宗教化にあるという事，また現代のアルピニストに見られるような極限状態への挑戦により生じる命がけの体験が，登山家達をスピリチュアルな世界や全てを超越した霊的な交流へと誘う効果がある事, 山のスピリチュアリティに触れる事は, 限界への挑戦や克服を通じて自らを問う事につながると捉えられている事，また宗教的な制限を受けない多様な属性を持つ人達が，それぞれ自由に登山に挑戦する事が出来るのが近代登山の特徴であり，だからこそその自由にも様々な危険と責任が伴うという事が明らかになった。また日本の近代登山のブームの背景には西洋的近代教養主義の影響が見られる事，日本の山岳信仰の伝統が，それぞれ近代登山や山岳文学の新たなスピリチュアリティにも影響を及ぼしている事が明らかになった。

こうした山の非宗教化と新たなスピリチュアリティの興隆の動きは，現代における個人の宗教化とアイデンティティの問い直しの動向について興味深い事例を提示している。近代アルピニズムの中にみられるような，個人のスピリチュアリティがより尊ばれる動向と，修験道をはじめとした信仰登山の伝統への郷愁をよびさます動向とは，両極にありながら同じ根を有している。その共通点とは「個人の宗教化（再聖化）」（島薗，２００７年）の傾向，つまり新たに個人が自分自身の宗教性やスピリチュアリティを選び取ろうとする傾向の事であり，こうした流れが時に公共空間への参与を促す事になる。公共空間が担わざるを得ない宗教性やスピリチュアリティについての評価は，その国の宗教的動向によりばらつきがあるが，儒学をはじめとした諸学の伝統と近代主義的な西洋思想が習合する中から近代の伝統を創ってきた日本においては，ヨーロッパ同様に今までは過小評価される傾向があった。しかし個人の宗教化は，現代の公共空間に宗教的要素を導入する可能性や志向性を含んでおり，社会の様々な争点に宗教性やスピリチュアリティが関与していく可能性は，今後一層高まっていくと考えられる。

日本の現状を考えるとき，前述したような１９８０年代以降の日本におけるネオナショナリズ

ムの興隆は，こうした個人化の進展と関連づけて理解する事が出来る。日本の宗教性の優位を強調するような言説の高まりの背景には，グローバル化が進む中でアイデンティティが拡散する不安に対処する為に，超越的な存在との関わりの中で自らを位置づけ，ある共同性に身を寄せるとともに，個人としてのアイデンティティを再構築しようとする現代的な志向性の存在があった。こうして個人の宗教化は現代の公共空間に宗教的な要素を持ち込もうとする志向性を持つ事となり，それが公共空間への宗教やスピリチュアリティの浸透を促す事につながった。近代登山の発展や山のスピリチュアリティの興隆は，こうした文脈で捉える必要がある。しかし宗教的日本人論の興隆は，同じ公共空間内のマイノリティに該当する人達の多様性を排除する方向で影響しかねない側面がある。再聖化された公共空間としての現代の山々は，そうした排除する側とされる側のそれぞれのスピリチュアリティのアリーナであり，そこで多様な属性を持つ人達の声を吟味していく事が，宗教的な性格を今なお宿す山の意義を再確認する事につながる。それこそが，山のスピリチュアリティを問う事の今日的意義であるといえよう。

第３章　結語

現代人が近代登山を通じて求める「山のスピリチュアリティ」は，特定のイデオロギーに縛られないアイデンティティのあり方や新たな宗教観，死生観などの自由への希求が反映されたものであった。近代化による影響を受けているという意味では，その方向性はまったく異なるものの，日本の近代登山は伝統的な山岳信仰と実はその根を共有している。しかし近代登山と「山のスピリチュアリティ」が，多様な属性を持つ人達のニーズの受け皿となり，異なる多様な背景を持つ個人のそれぞれの素養に根ざしたスピリチュアリティの在処となってきたのである。こうしたスピリチュアリティは，現代人の生きる力の源泉として心の奥底に存在し得るものであり，そこには特定の宗教的型に当てはまらないものが多く含まれている。

一方で上述の通り，多様な背景を持つ人達が求めた日本型の近代登山にも様々な課題があった。百名山や近代山岳文学にみられるような近代性と伝統の融合の試みは，日本における近代化とナショナル・アイデンティティ喪失の可能性への不安感を反映してもいた。こうして多様な立場の人達の視点から見た，特定の宗教やナショナリズムによらない「山のスピリチュアリティ」を明らかにする事で見えてきたのは，かつて宗教とされていたものが果たしていた役割が，現代社会においてはより広い「宗教的なるもの」や「スピリチュアルなもの」へと展開している現状であった。このように山のスピリチュアリティを問う事は，非宗教化（世俗化）されたはずの山の再聖化が今なお宿す聖性の意義を問う事であり，それは我々が現代社会において伝統的な宗教を超えてなお求めようとしている聖なるもののありかを示唆しているのである。

【参考文献】

Marilyn Ivy, *Discourses of Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan,* University of Chicago Press, 1995.

タラル・アサド『世俗の形成―キリスト教，イスラム，現代』（中村圭志訳）みすず書房，２００６年（Talal Asad, *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity.* Stanford University Press, 2003.）
阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』（ちくま新書）筑摩書房，１９９６年
阿満利麿『人はなぜ宗教を必要とするのか』（ちくま新書）筑摩書房，１９９９年
阿満利麿『宗教は国家を超えられるか―近代日本の検証』（ちくま学芸文庫）筑摩書房，２００５年
ハンナ・アーレント「国民国家の没落と人権の終焉」『全体主義の起源２　帝国主義』（大島通義・大島かおり訳）第５章，みすず書房，１９７２年
ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』（白石隆・白石さや訳）NTT 出版（増補版），１９９７年（Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism,* Verso Books（Revised）, 1991）
石塚真一『岳』第１－９巻，（ビッグコミックオリジナル）小学館，２００５〜２００９年
岩科小一郎『富士講の歴史―江戸庶民の山岳信仰』名著出版，１９８３年
岩鼻通明「山岳信仰と女人禁制―立山と羽黒山の比較から」（第１２章，安田喜憲編著『山岳信仰と日本人』国際日本文化研究センター「文明研究プロジェクト」シリーズ第２弾）NTT 出版，２００６年
植村直己『青春を山に賭けて』文藝春秋，１９７７年
植村直己『極北に駆ける』文藝春秋，１９７７年
植村直己『エベレストを越えて』文藝春秋，１９８２年
植村直己『妻への手紙』文藝春秋，２００２年
Wuthnow, R, *After Heaven,* University of California Press, 1998.
梅原猛『神殺しの日本―反時代的密語』朝日新聞社，２００６年
河西英通『東北―つくられた異境』中公新書，２００１年
ロイス・キース（藤田真利子訳）『クララは歩かなくてはいけないの？―少女小説にみる死と障害と治癒』明石書店，２００３年（Lois Keith, *Take Up Thy Bed and Walk: Death, Disability, and Cure in Classic Fiction for Girls,* Routledge, 2001.）
菊池俊朗『山の社会学』（文春新書）文藝春秋，２００１年
菊池俊朗『北アルプス―この百年』（文春新書）文藝春秋，２００３年
久保田展弘『修験の世界―始原の生命宇宙』（講談社学術文庫）講談社，２００５年
ジョン・クラカワー（佐宗鈴夫訳）『荒野へ』集英社，１９９７年（Jon Krakauer, “Into The Wild,” Vintage Books, 1997.）
Jon Krakauer, *Eiger Dreams: Ventures Among Men And Mountains,* Pan Books, 1998.
ジョン・クラカワー（海津正彦訳）『空へ―エベレストの悲劇はなぜ起きたか』文藝春秋，２０００年（Jon Krakauer, *Into Thin Air: A Personal Account of the Mt. Everest Disaster,* Anchor Books, 1999.）
ジョン・クラカワー（佐宗鈴夫訳）『信仰が人を殺すとき―過激な宗教は何を生み出してきたのか』河出書房新社，２００５年（Jon Krakauer, *Under the Banner of Heaven: A Story of Violent Faith,* Pan Books, 2004.）
桑原武夫『登山の文化史』（創元社，１９５３年）平凡社ライブラリー，１９９７年
小泉武栄『登山の誕生―人はなぜ山に登るようになったのか』（中公新書）中央公論新社，２００１年

Maria Coffey, *Fragile Edge –Loss on Everest,* Arrow Books, Random House Groups, 1989.

Maria Coffey, *Where the Mountain Casts its Shadow: The Dark Side of Extreme Adventure,* St Martins Press, 2003.

Maria Coffey, *Explorers of the Infinite,* J P Tarcher, 2008.

子安宣邦『「近代の超克」とは何か』青土社，２００８年

小山靖憲『熊野古道』岩波新書，２０００年

五来重『山の宗教―修験道案内』（角川学芸出版），角川書店，２００８年(a)

五来重『修験道の修行と宗教民俗』（五来重著作集第５巻），法藏館，２００８年(b)

佐伯啓思『自由とは何か―自己責任論から理由なき殺人まで』講談社現代新書，２００４年

佐々木高明『山の神と日本人―山の神信仰から探る日本の基層文化』洋泉社，２００６年

佐瀬稔『狼は帰らず―アルピニスト森田勝の生と死』（中公文庫）中央公論社，１９９８年(a)

佐瀬稔『長谷川恒男―虚空の登攀者』（中公文庫）中央公論社，１９９８年（b)

佐瀬稔『残された山靴―佐瀬稔遺稿集』山と渓谷社，１９９９年

ジャン・ポール・サルトル『存在と無―現象学的存在論の試み＜１＞＜２＞＜３＞』筑摩書房，２００７―２００９年(Jean-Paul Sartre, *L'Etre et le Néant,* Gallimard, 1976.)

島薗進『精神世界のゆくえ―宗教・近代・霊性』秋山書店，２００７年

島田裕巳『無宗教こそ日本人の宗教である』（角川 one テーマ 21）角川書店，２００９年

末木文美士『日本仏教史―思想史としてのアプローチ』（新潮文庫）新潮社，１９９２年

鈴木正崇『女人禁制』吉川弘文館，２００２年

ヨハンナ・スピリ（シュピーリ）『アルプスの山の娘―ハイヂ』岩波文庫（野上弥生子訳），１９９１（１９３４）年（Johanna Spyri, Heidi: *Heidis Lehr und Wanderjahre / Heidi kann brauchen,was es gelernt hat.* Wien, Tosa Verlag, 1980（1880-1881）.）

レイチェル・ストーム「共同性・文化・スピリチュアリティ」葛西賢太，伊藤雅之訳（Storm, R, *Community, Culture and Spirituality*），樫尾直樹編『スピリチュアリティを生きる』せりか書房，１８６－２０８ページ，２００２年

谷文晁『日本名山図会』国書刊行会，１９７０年

波平恵美子『日本人の死のかたち―伝統儀礼から靖国まで』（朝日選書７５５）朝日新聞社，２００４年

成瀬不二雄「富士山絵画の始まり」『山岳信仰と考古学』（山の考古学研究会編）同成社，２３１－２４１ページ，２００３年

新田次郎『強力伝・孤島』新潮文庫）新潮社，１９６５年

新田次郎『孤高の人（上・下)』新潮社，１９７３年

新田次郎（原案)・坂本眞一『孤高の人（１－５巻既刊)』ヤングジャンプコミックス，２００８年（連載中)

新田次郎『栄光の岸壁（上・下)』新潮社，１９７６年

新田次郎『聖職の碑』講談社，１９７６年

新田次郎『八甲田山死の彷徨』新潮社，１９７７年

新田次郎『銀嶺の人（上・下)』新潮社，１９７９年

新田次郎『アルプスの谷・アルプスの村』新潮社，１９７９年
新田次郎『富士に死す』文藝春秋，２００４年
フリードリッヒ・ニーチェ『ニーチェ全集＜９・１０＞ツァラトゥストラ（上・下)』筑摩書房，　１９９３年（Friedrich Nietzsche, *Also sprach Zarathustra,* Anaconda, 2005（1885）.）
野口健『落ちこぼれてエベレスト』集英社，２００３年
野口健『富士山を汚すのは誰か―清掃登山と環境問題』（角川 one テーマ 21）角川グループパブリッシング，２００８年
野口健『自然と国家と人間と』日本経済新聞出版社，２００９年
ジュディス・バトラー，ガヤトリ・スピヴァク（竹村和子訳）『国家を歌うのは誰か？―グローバル・ステイトにおける言語・政治・帰属』岩波書店，２００８年（Judith Butler, Gayatri Chakravorty Spivak, *Who Sings the Nation-state?: Language, Politics, Belonging,* Palgrave MacMillan, 2007.）
ジュディス・バトラー（佐藤嘉幸・清水知子訳）『自分自身を説明すること―倫理的暴力の批判』月曜社，２００８年（Judith Butler, *Giving an Account of Oneself,* Fordham University Press, 2005.）
はまみつを『黎明の北アルプス』郷土出版社，１９９４年
Heelas, P, *The New Age Movement,* Blackwell, 1996.
深田久弥『日本百名山』新潮文庫，２０００年。
古澤有峰「医療と宗教のあいだ―不思議の国のスピリチュアルケア（３)」『春秋　２００９年　１月号(No.505)』春秋社，２００９年
Beckford, J, “Religion, Modernity, and Post-Modernity,” Brian Wilson（ed.）, *Religion: Contemporary Issues,* Bellew, pp.11-23, 1992.
町田宗鳳『山の霊力―日本人はそこに何を見たか』講談社選書メチエ，２００３年
松田雄一「マナスル登頂と登山ブーム」，社団法人日本山岳会会報「山」，２００５年９月号（http://www.jac.or.jp/info/news/200509.htm）
トーマス・マン（高橋義孝訳)『魔の山（上・下)』新潮文庫，１９６９年（Thomas Mann, *Der Zauberberg,* S. Fischer Verlag, Berlin, 1924）
宮家準『霊山と日本人』日本放送出版局，２００４年
宮家準『修験道―その歴史と修行』（講談社学術文庫）講談社，２００１年
宮本常一『女の民俗誌』岩波現代文庫）岩波書店，２００１年
宮本常一『山の道』八坂書房，（１９８７年）２００６年
安田喜憲編著『山岳信仰と日本人』（国際日本文化研究センター「文明研究プロジェクト」シリーズ第２弾）NTT 出版，２００６年
山折哲雄『日本人と浄土』講談社学術文庫，１９９５年
夢枕獏『神々の山嶺（上・下)』集英社，２０００年
夢枕獏・谷口ジロー『神々の山嶺（全５巻)』集英社文庫コミック版，２００６―２００７年
養老孟司『無思想の発見』（ちくま新書）筑摩書房，２００５年
Roof, W. C, *Spiritual Marketplace,* Princeton University Press, 1999.

On Mountain Spirituality: The Secularization and Resacralization of Mountains.

Yumi FURUSAWA

In this article I analyze some aspects of the form of spirituality that can be found both in the Japanese tradition of mountain worship and in modern-day mountaineering as practiced in Japan and western countries. Exploring the reasons why people have felt drawn to mountains throughout history, I compare traditional mountain worship and the modern practice of mountain climbing. To do so, I discuss examples taken from Western and Japanese literature on mountains. Based on the results of this investigation, I describe how mountains were secularized, resacralized and spiritualized. I also examine religious and spiritual aspects of mountaineering and the recent general popularity of spirituality in various fields including the public sphere, the study of gender, the study of minorities and death-and-life studies.